

## ブリュッセルで考える

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：ブリュッセルには何をしに行かれたのですか。

A：（林 明夫 以下略）EC（欧州委員会）の主催で開かれた「2000年雇用週間」の会議に出席するためです。会議は11月7日～9日まで王宮の下の方にある「国際会議場」で開かれました。750名の登録者で、ECの会議であったためか日本からの参加はここでも私一人でした。

Q：どのようにして、この会議をお知りになったのですか。

A：6月下旬にパリで閣僚会議と同時進行で開かれた「OECD2000フォーラム」に参加した折りに、この会議があるのを知りました。ヨーロッパで開かれる最も大規模な、又、正式な雇用に関する会議であると参加者からお聞きしたので、是非参加させてもらいたいと担当者をお願いし、名刺をお渡ししたところ、8月下旬に連絡があり、申し込ませて頂きました。

Q：このような国際会議には誰でも出席できるのですか。

A：参加を希望する理由と、所属や氏名を明確に伝え、主催者が会議の趣旨に合致していると判断すれば参加は可能です。

Q：日本語の同時通訳はつくのですか。

A：OECDフォーラムのときは、日本人が講師で出るときには、日本語への同時通訳がつけました。今回の「雇用」についての会議はもともとECのためのもので、日本人の参加者は見込んでなかったためか、日本語への同時通訳はありませんでした。

Q：では、どうやって理解するのですか。

A：今回の会議での使用言語は、英語、フランス語、ドイツ語の三つの言語でした。この三つの言語への同時通訳はありました。私は、今のところ英語しかよく理解できませんので、ドイツ語やフランス語でのお話は英語の同時通訳で聴かせて頂きました。ただ、4分の3位の方は、母国語は別の言語でもすべて英語でやって下さるのでたすかりました。

Q：なぜ、このEC主催の「雇用」に関する会議に出席したのですか。

A：理由はたくさんあります。最も大きな理由は、日本の失業率が少しずつ上がって、じわじわと4.7%まできました。これと関係します。政府の公共事業投資などの経済政策によって景気が大幅に回復し、GDPを3～5%くらいまで押し上げればよいのですが、その可能性は極めて低いと私は考えます。失業率が少しずつじわじわ上昇し、5%を超えどんとんと10%に近づく可能性が極めて高いとさえ思えます。

この日本の状況とは逆に、10年前まで10%～20%近くあった失業率を10年間で10%近く下げた

国がたくさんあるヨーロッパでは、一体何をどうしたのか。「我が社、我が街から失業者を 1 名も出さないために」どうしたらよいかを考えるために、じっくりと腰を落ち着けてヨーロッパの「失業率を下げる努力」を勉強したく思いました。これが最大の理由です。

Q：会議ではどのようなことが話し合われていましたか。

A：「完全雇用」つまり「失業者のいない状況」を、最終的に目指す。とりあえず、2010 年までに EC 全体で 70 %に限りなく近づける（日本が現在 68%なので、とりあえずの目標は日本の状況にまで近づけると何人かが言っていました。ちなみにアメリカは 72%位です。）特に女性は 60%まで雇用率を引き上げる。そのためにどうするかといえば、英語で恐縮ですが、Knowledge Based Economy（ナレッジ・ベースト・エコノミー）つまり、「知識に基礎づけられた経済」に適応できる仕事の提供が大事ということで、要するに IT（情報技術）とりわけインターネットを働く人すべてが使いこなせるようにしようというのが、会議の内容でした。各国の労働組合や共産党の書記長の立場の人までもが、IT、IT と叫んでいるのには驚きました。

あとは、Education, Education, Education(教育、教育、教育)が話題の半分でした。Learning, Learning, Learning (学習、学習、学習)と叫び続ける人も何人もいました。Life Long Learning 単なる生涯学習ではなくて、学校を卒業してまもなくから、退職した後に再就職するための学習も含めた「雇用に値するだけの仕事上の技術を向上させるための生涯学習」(ライフ・ロング・ラーニング)が叫ばれていました。労働組合の書記長までが、コンピューターを駆使できると収入が増え雇用が安定し失業率が下がると叫んでいました。とにかく、ものすごい努力でせっかく EU11 カ国で 9 パーセントまで下がった失業率を何としても、もっと下げて、日本やアメリカのような低い失業率の状況までもっていききたいという思いが感じられました。

スペインなどは、5 年前には 24%だったのが 14%まで失業率を下げてきたので、もう 2 年で 10%を切れると国をあげて失業率の引き下げに取り組んでいます。

Q：なぜそんなに失業率を下げるのが大事なんですか。

A：日本だけにいるとよく分からないと思いますが、失業率が 10%を超すと、なぜか社会問題がドツと出てきます。「失業は人間の尊厳を奪う」こともあります。自暴自棄になり、アルコールに依存し、精神的に参ってしまう人もいますし、現金がないと生きていけませんから、犯罪に走る人も出てくる。失業率 10%以上の国は、夜の一人歩きはたとえ男性でも危険とさえ言えます。

長い長い冬の時代を終え、ヨーロッパはようやく失業の少ない「夢のような時代」を迎えました。その意味で規制緩和や行政改革を大胆にスタートさせたサッチャー女史と、80 年代、90 年代と当面のヨーロッパの競争相手となった日本は、高く評価されるべきかも知れません。高い失業率のもとでの社会不安と、このままでは日本とアメリカとりわけ日本に世界を制せられてしまうという危機感が鉄の「サッチャー」を生み、難しいハードルを自らに課した「欧州通貨統合」を現実のものにしたと思えます。

ヨーロッパは、どこの国でも大きな街の郊外は歴史始まって以来の建築ラッシュで、街の中心街からホームレスの人が激減しています。

Q：会議の他に何か催しはありましたか。

A：地下の展示場には、ILO をはじめとする国際機関や各国政府、地方自治体、大学やシンクタンク、

コンサルタントグループなど 1000 以上の団体が代表者を派遣して PR と情報交換をしていました。すべての団体の目的は唯一つ。「雇用を増やして、失業率を減らし、豊かなヨーロッパをつくること。」

Q：2001 年もこの会は開かれますか。

A：11 月の下旬に開かれるようです。これからの日本の雇用を考えると、長く苦しい思いから抜けつつあるヨーロッパの経験を勉強することは、意味のあることと思います。

今までは、私一人で出かけていましたが、読者の皆様の中で、もし産業政策や雇用問題にご関心のある方がおられたら、ご一緒に行きませんか。特に労働行政や研究者の方、ジェンダーや高齢者雇用問題等に関心の深い方はうってつけです。5 月には「OECD フォーラム 2001」もパリであります。ご興味のある方は FAX で私まで連絡を下さい。(0284-73-1520)

Q：最後に、今月も本の紹介をして下さい。

A：先月号の紹介は、随分ためになったと多くの方から言われました。読者の皆様の参考になればと思い、今月も 3 冊紹介させていただきます。

①波頭亮（はとう・りょう）著「三十代からの幸福の経済学」1999 年 12 月 6 日 PHP 研究所刊。

「わがままで」豊かな生き方、自分のスタイルにこだわれ。人が何と言おうと、社会がどう変わろうと内なる欲望を貫く人生戦略。以上が、本のカバーの宣伝文句ですが、内容は、1990 年代に日本の経済に何が起こったのか、その結果、日本はどのようになるのかが、わかりやすく書かれています。10 年前の氏の「新幸福論」をお持ちの方は、読み比べてみると波頭氏の鋭い指摘が胸にジワーとききます。

この 10 年の日本の凋落の本当の原因を知りたい人は、是非お読み下さい。分かりやすい文章です。

②八代尚宏（やしろ・なおひろ）著「雇用改革の時代」1999 年 12 月 20 日中央公論社発行（中公新書）。

「日本の雇用についての問題点」を「どのように解決すべきか、その解決方法」がコンパクトにまとめられています。よくこれだけの小さな新書版に、最先端の考え方が分かりやすく示されたものと、舌を巻くほど面白く、ためになります。少し難しいところもありますが、あせらずに 1 日に 1 章ずつくらい、ゆっくりとかみしめながらがんばって読み通せば 1～2 週間で、これからの雇用がどうあらねばならないか、おわかりになると思います。元気が出ます。

③松村敬司（まつむら・けいじ）編著「二宮翁夜話」1995 年 1 月 24 日日本経営合理化協会出版局刊。

栃木県に誇る人物はたくさんおられると思いますが、私は、江戸時代後期でしたら二宮尊徳先生を最も尊敬しています。「一所懸命」（一つの所で命を懸ける）位に熱心に働くとは、どのようなことか、二宮先生の考えを具体的に教えてくれるのがこの本です。話し言葉で分かりやすく書かれていますので、どなたでも理解できます。不況から脱し切れずに苦しんでおられる方は、是非ご一読下さい。今からどうしたらよいか考えるヒントが山ほど示されています。

Q：最後に一言どうぞ。

A：「国民の道徳」西部邁（にしべ・すすむ）著もご紹介したかったのですが、600 ページ中まだ 200 ページしか読み終わっていないので、十分お伝えできません。ただ、一読の価値はあるような気がします。西部氏も、よくここまでまとめ上げ立派。12 月はケープタウンで、PFI（パブリック・ファイナンス・イニシアティブ）の第一回世界大会があり、出席の予定なので「ケープタウンで考える」をクリスマスプレゼントとしてお贈りします。

2000 年 11 月 10 日にて記す